
もどきども 第一話「vs.いやがるサキュバス」

維川 千四号

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

もどきども 第一話「vs. いやがるサキュバス」

【Nコード】

N3068L

【作者名】

維川 千四号

【あらすじ】

現代活劇ファンタジー“もどき”第一弾。
今回の対戦相手は「夢魔・サキュバス」。
しかし、妖艶・好色のサキュバスが“いやがる”とは、これ如何に。

序

「ねえ、お願い。なんでもするから。なんでもしてあげるから。だからお願い、殺さないで」

「……………」

そんな言葉を見殺しして一步一步、跪く彼女に近づく。

「嫌、来ないでよ。私はまだ、死にたくない　まだ消えたくない
！」

「……………」

涙を流す彼女の目の前で立ち止まり、音もなく右手を振り上げる。
「やめて、やめてよ。冗談でしょ？ 私を斬るの？ そんな刃で、
そんな刃で」

流れていたことがまるで見間違いのように彼女の涙が止まり、その瞳に明確な殺意が宿った。そして、

「そんな綺麗な刃を、この私に見せつけないでよ！」

ヒステリックに叫びながら、彼女が飛びかかってきた　いや、
飛びかかろうとした。

「へえ。お前には、そう見えんのか」

そう言っ、オレは結城真実^{ゆづき まみ}を斬り下ろした。

*** 序 * (後書き)**

はじめまして。

小説初心者の、千四号チヨウサと申します。

なにぶん初心者の手くそなので、非常に拙い文章ですが、楽しんで頂けたら嬉しいです。

感想や批評を頂けたら、尚嬉しいです。

* 起 *

ふすまを勢いよく開け放ち、オレは部屋に入る。そして、
「起きろ、ヴィアン。朝飯だ」

目の前に敷かれた布団に声を掛ける。

すると、モゾモゾと少しだけ布団が動き、

「うーん……あと五分……」

と、その中から男の声が返ってくる。

「それはいい歳の大人が言う台詞じゃねえ」

「うーん……僕には構わず、君は先に行くんだ……」

「それはいい歳の大人が言うべき台詞だが、ここで言うな。戦場で
言え」

「……………」

イラッ。

「……グッドモーニン、グ！」

おそらく腹部があるだろう場所に、オレは鋭い右ローキックをプレ
ゼントする。

「痛いっ！」

見事に決まったプレゼントを受け取りながらも、ヴィアンも布団
も大した変化はなく、依然布団の中から、

「いきなり蹴るなんてひどいじゃないか」

と、文句が返ってきた。

「いきなりじゃねえよ。ちゃんとアイサツしただろ」

「君は何か勘違いしている。グッドモーニングは『これから蹴りま
すよ』の言葉じゃない」

……確かにそうだ。

確かに“宣言”は大事だ。
なので、

「こーれかーら蹴ーりまーす」

今度はサッカーアニメのシュートのように、高らかに右足を後ろに振り上げて

「タイム、タイム、タイム！ 今出るから。今まさに出るから」

言われた通り、彼をゴールに叩き込むことをやめた。

オレはルールを守る男だから。

「……………」

「……………」

しかし、目の前の布団の塊に変化はない。

ヴィアンはルールを守らない男だった。

なので、きちんとしたペナルティを、あらかじめ持っていたソレを、少しだけ掛け布団を持ち上げ、

「……………プレゼントフォーユー」

中に素早く放り込んだ。

するとすぐさま、

「ギニヤアアアアアッ！！」

爽やかな朝に似つかわしくない絶叫と共に、彼は布団の中から転がり出てきた。

「おう、やつと出てきたか」

「き、君は何てモノを投げ込むんだ！ 鬼か、君は！？」

涙目で、まるでオレが非道をしたかのように、ヴィアンが訴えてきた。

そんな彼に、

「ただの銀の十字架を投げ込んだだけじゃねえかよ。それに“鬼”はお前だ」

オレは誠意を持って対応する。

「じ、十字架だなんて……………神社の息子がそんなモノを持っていてイイと思っっているのかい！」

「いいんだよ、別に。この国には八百万やおんもんのもカミサマがいるんだから、一人二人増えたって分かんねえし。それに、誰を信じようとオレの

勝手だし」

「なんて不信心な発言だい……それに、君はカミサマ信じているのかい？」

「いや、全然。会ったこともねえ奴、信じるわけねえだろ」

「うわ。神社の息子としては、ことごとく不信心な発言だね」

「ついでに言っと、毎日会っててもお前のことは全く信じてねえから」

「うわ。ついでにひどいことを言うね、君は」

「んじゃ、さらにひどいと言われる前にさっさと飯に来い」

「はいはい。今日の朝ご飯は何かなあ？」

とても親切なオレは、これから自己紹介と状況説明をしておくことにする。まあ、自己紹介はともかく、純和風家屋の一室の食卓で長身の外国人が隣で納豆を美味そうに食っている状況は、是非とも説明するべきだろう。ていうか、説明させてくれ。

オレの名前は薄原智流。はつもとちゅうりゅう 津々浦町民であると同時に津々浦第二高校（通称・津々高）の二年生でもある男子だ。

ちなみに、第二と付いているが第一高校は存在しない。その理由は誰にも分からず、津々高七不思議の一つとなっている……まあ、あくまで余談だけど。ていうか、学校自体が七不思議の一つってのいうは、どうかと思うけど。

で、自己紹介を続けると、実家は夢守神社ゆめもじっていう意外と由緒ある（らしい）神社で、オレはその次期神主でもある。ま、当分先の話だけど。ていうか、本当は継ぎたくないんだけど、こんな不満を言ったところでなんの解決にもならないし、それどころか問題が増えるということは春休みに“死ぬほど”経験したので、これ以上は言わないでおく。

呼んで字の如く『夢を守る』夢守神社。悪夢で悩む人、不眠症で悩む人、そのほか夢や眠り、そして心の問題で悩む人が全国からや

つてくる、知る人ぞ知る神社。

その神社の長男が、このオレだ。

そんなオレは今、境内の自宅にて家族揃って朝飯を食べている。
軽く紹介すると、味噌汁をすすっているのが父・直己なおき、沢庵をか
じったのが母・美代子みよこ、玉子焼きを頬張ったのが姉・凜花りんか、そして
未だ納豆に舌鼓を打っているのが問題の居候・ヴィアンだ。

スラリとした長身に、ウェーブのかかった灰色の長髪。そして丈
の合わない浴衣（父のお古）を着た年齢不詳（見た目二十代後半く
らい）の外国人、それがヴィアンという男だ。

どうしてそんな得体の知れない男がウチに居候しているかをちゃ
んと説明するには、かなりの時間と労力を使うことになるので、こ
こでは割愛して、こちらも軽く紹介させてもらうと、春休みに拾っ
た“吸血鬼”がヴィアンだ。

.....

……まあ、念のため言つとくと、オレは電波さんでも、ファンキ
ーな脳みその持ち主でもない。

至って普通の男子学生……とも言い切れないのが悔しいが、それ
でも確かにオレは人間で、ヴィアンは吸血鬼　いや、吸血鬼“も
どき”だ。

と、誰に言ってるかよく分からない語りはこの辺にして、朝飯を
終えたオレは身支度を整え玄関へ向かった。

そして、

「いつてらっしゃーい……」

寝ぼけ眼のヴィアンに見送られ、家を出た。

……あの野郎、また寝るつもりだな。

そんなことを思いながらも、境内から続く石段をやや早足で降り
る。

何故か説明口調で長々と語っていたので、なかなかの時間になっ
てしまった。

さすがに二年生初日の始業式から遅刻はマズい。

なので、途中からは一段飛ばしで、石段を駆け降りる。結構危険な技だが、ガキの頃からずっとやっている技なので、何一つ狂いなくオレは降りきった。

そしてそのタイミングで、

「おはよう、智流くん」

と、声を掛けられた。

ガキの頃からずっと知っている人物に。

同じ高校に通う幼なじみ・結城真実^{ゆづき まみ}に。

今回のお話の対戦相手・いやがるサキュバスに。

だけど、このときのオレはお約束通り、まだ何も知らない。

* 承 *

「おはよう、智流くん」

「おはよ、結城。急がないと遅刻すんぞ」

「それは智流くんもでしょ」

「っーか、珍しいな。お前がこんな時間に登校なんて」

「まあね。今日はちよつと寝坊しちゃって……」

「ふーん。そりゃ珍しい」

品行方正・学業優先・優等生。

しっかり・きっちり・すっきり。

そんな言葉が、隣を歩く結城真実には、よく似合う。

いつも通りの、しっかり校則を守った制服。

いつも通りの、きっちりまとまった三つ編み。

いつも通りの、すっきり無駄のない黒縁眼鏡。

いつも通りの、ぴっかり色を添える桜の花の髪留め。

……。

……あれ？ 一個、多くね？

っーか、『ぴっかり』って何よ？

っーか、髪留めって何よ？

スクールバックにアクセサリを付けることも、スカートの丈を短くすることも、もちろん髪を染めることも、それどころかオレが学校にゲーム機（携帯用じゃなくて家庭用の）を持っていくのも、NGだった結城が『飾りの付いた』髪留めをしている。

……え？ 何？ もしかしてアレ？

天変地異の前触れ？

確かに地球温暖化がひどいとか聞くもんなー。

今年は例年より桜が早く咲いたもんなー。

……。

「つーか、そうだよな。」

「春だもんな。新年度だもんな。」

「いくら真面目・生真面目・大真面目の結城だって、少しは浮かれるもんな。」

「天変地異とかは言い過ぎだな。」

「と、プチ反省していると、」

「ヴィアンさん、だっけ？」

「思い出したように結城が言った。」

「ん？ 誰が？」

「今、智流くんちに泊まつてる人」

「あー、そんな人もいたような気が……」

「そんな人って、智流くんの恩人でしょ。貧血で倒れてるところを助けてもらったんでしょ」

「あー、そんなこともあったなあ。懐かしいなあ」

「……………」

「“貧血”ね。」

「確かに、あのときのオレは血を失ってたな。」

「血が足りてなかったな。」

「物は言いよう、とはこのことだ。」

「もちろん、そんな事件を知らない結城は、気にせず話を続ける。」

「もー。懐かしいって、ついこのあいだじゃない。しっかりしてよね、今日から二年生なんだから」

「あー、来年はもう大学受験かよ。ついこのあいだ高校受験したつーのに……」

「……………はあ。春休みは懐かしくて、去年はついこのあいだ、なのね。智流くんのその時間感覚が私は心配になるわ」

「そう言って中指でこめかみを押さえる 困ったり悩んだときの」

「結城の癖。」

「これもガキの頃から見慣れた光景。」

「確か、中学校の頃から……」。

「そついや、中学の卒業式の時もお前、寝坊してたな」

「え？ そつだっけ？ 忘れちゃったよ、そんな昔のこと」

「おいおい。それも去年のことだぞ。人のこと言えねえじゃねえかよ」

「いいの。今は智流くんの話をしてるんだから。ていうか、そんなことよく覚えてたね」

智流くんなのに。

と、ボソツと呟く結城。

「ちよい待て。今、聞き捨てならねえセリフが聞こえたぞ」

「え？ 幻聴じゃない？ 気のせいだよ。そういう風に思ってるから、そういう風に聞こえるんだよ」

「……まあ“思えば”聞こえるってのは認めるけどよ」

「つーか、認めざるをえないけど。」

“思えば”そう感じる。

“思うこと”で現実となる。

それは、ついこのあいだの春休みに実体験ありありのことだから。

「で、よく覚えてたね、そんなこと。何か記憶に残るようなことあったっけ？」

「ありありだ。その日に初めて、お前が津々高に入るってオレは知ったんだから」

まさか小中学校に続き、高校まで一緒になるなんて思ってもみなかったし。

「つーかさ、なんで津々高なんか入ったんだよ？ お前の成績なら隣の進学校とか行けただろ」

津々浦第二高校は部活動関係は有名だが、お勉強の方はイマイチな学校だ。

さらにオレは帰宅部で、成績も中の中。

だけど結城は同じ帰宅部でも、成績は上の中。

中学校のときも勉強ができたヤツだ。

それが何故、オレと同じ高校に？

「……智流くんだけにホントのこと言うと、遠くの学校に行くの面倒だったの。毎日バス通学とか疲れそうだし」

ウチのお母さんには内緒ね。

と、小さく舌を出す結城。

……………。

……えらくカワイイじゃねえかよ。

これが幼なじみじゃなければ、軽く萌えてるところだった。

つか、世間は『幼なじみ』のイメージを間違えてる。

ほとんど家族みたいなモンだから、フラグなんか立たねえっつの。

そして、そんなノーフラグな結城が続けて言う。

「だけどさ、まさか高校まできて別々のクラスになるなんてね。今まで全部同じクラスだったから、逆に不意打ちって感じ。神様って案外ノリ悪いんだね」

「いやいや、ノリで運命決められても困るし」

「でも今日から新クラスだから、また一緒になれるかもね」

「ああ、そうだな　ていうか、そうだとイイな」

そう言い切った直後、結城の歩みが止まった。

「けどオレがそれに気付いたのは、彼女から数メートル離れてからだった。」

「ん？　どうした？　結城」

オレも立ち止まり、半身だけ彼女の方を振り向いた。

「い、いや、智流くんがあまりにも素直だったから、世界の終わりがくるのかとビックリして……」

「それは言い過ぎだ」

天変地異より言い過ぎだ。

「第一、オレきつかけでラグナロクなんか起きるわけねえし」

そんなこと起きたら、カミサマ適当過ぎだし。

「いや、もし同じクラスになったら、また宿題写させてもらおうか
と思つて」

オレがそう言うと、一拍置いてから、

「一教科につき千円頂きます」

と、眼鏡の位置をクイツと直して言った。

「そこに『幼なじみ割』適用で！」

「ダメです。『学割』との併用はできません」

「なんと！？ まさかの割引の落とし穴！」

「さらにクーポンも併用不可です」

「クーポンあったの！？ つーか、よく考えりや学生以外は宿題なくね？」

「『学割』適用で一教科千円。これ以上は鑑一文まけられまへん」

「ちよい待て！ 急に変な関西弁入れんな！ お前の優等生キャラ崩れるから！」

などと戯れていたせいで、二年生初日の始業式のこの日、二人仲良く遅刻することになった。

* 承・続 *

「ごめんなさい」

と、結城は謝った。

だけど凹んだのは謝られた方だった。

「おかえり」

「ん。ただいま」

立ち尽くす相手をそのままに、オレのところに戻ってきた結城。そして足並み揃えて、オレたちは体育館裏を後にした。

「つかさ、告白が体育館裏ってベタ過ぎね？」

体育館から十分離れ、校門近くまで歩いてきたところで、オレはそう笑った。

「こら、笑わないの。あの人だって真剣だったんだよ」

まったくもう、とこめかみを押さえる結城。

「まあ確かに、目は真剣過ぎて怖いくらいだったな」

まるで何かに取り憑かれているかのように。

「うーん……でも私、あの人と面識ないんだよね。学年だって一つ上の先輩だし。なんで突然告白されたんだろ？」

今度はこめかみをトントンとリズムカルに叩きながら、疑問を口にした。

「アレじゃねえの？ 一目惚れってヤツ」

「まったくさー。私みたいな地味キャラに？」

ないないない、と笑いながら結城は少し大袈裟に手を横に振る。

……地味キャラって自覚あったんだ。

つか、いまだきこれほどの優等生ルックスなヤツはいないから、逆に目立つけど。

まあ、変わらず着けている桜の髪留めは別として。

「でもさ、まさか本当にまた智流くんと同じクラスになるなんてね。朝言ってた通りになっただね」

「ああ、そのせいで遅刻しちまったけどな」

苦い顔をして、オレは言葉に少し嫌みを込める。

「それは私だって同じだよ。せつかく無遅刻無欠席で来てたのに……築き上げてきた優等生キャラが台無しだよ」

……あ、そっちも自覚あったんだ。

「つか、結城も遅刻したのに、なんでオレだけ罰当番なわけ？」

「それは智流くんが遅刻常習犯だからでしょ。しかも担任の先生がうおずみ魚住先生だし」

「あー、なんで一年に引き続き魚住さんなんだよ。オレ、あの人苦手なんだよなー」

「え？ そうなの？ 魚住先生、カッコイイしフレンドリーだから人気だよ？」

「いや、まあ、カッコイイのはイんだけど、フレンドリー過ぎるのが苦手なんだよ」

「ふーん、そうなんだ」

そう納得してから、少し間を開けて、

「じゃあ、私もフレンドリー過ぎ？」

と、結城が訊いてきた。

「は？ 何それ？ オレたち幼なじみじゃん。フレンドっつかフアミリーみたいなもんじゃん」

「そう……だよ。何それ、だよ。意味分かんない質問だよ。反省会もんだね。今の私はないわー」

ないないない、と笑いながら結城は少し大袈裟に手を横に振る。ちょうどそのとき、オレたちは校門を過ぎた。

そして、そこでオレは立ち止まった。

「あ、オレちよっと寄り道して帰るから、こっちの道行くわ」

「え？ そうなの？ あっ、もしかして、またゲーセン？」

おばさんに言い付けちゃうぞー、と同じく立ち止まった結城が意

地悪そうな笑みを浮かべる。

「そんなんじゃないやねえって。これから人と会う約束してんだよ」

「へー、珍しい。約束は平気で破る主義の智流くんが」

「……一体、お前はオレをどんなキャラに仕立てようとしてんだよ」

「んー、不良系オレ様キャラ？　だって現に今、金髪でサングラスにピアスまでして、さらには全身ヒョウ柄の」

「してねえよ！　小説じゃ分かんないけど、超普通の学ランを着た超普通の高校生だよ！」

「……か、オレにヒョウ柄の何を着せようとしたんだよ。」

「……てか、流れて自分のこと超普通とか言っちゃったけど、もう完全に普通じゃないんだよな、オレ。」

「ま、目の前にいる結城は何も知らないけど。」

「知らなくてイイし、知らない方がイイし。」

「んじゃ、きちんと約束果たしてくるわ」

「了解。あんまり遅くなっちゃダメだよ」

「ウチの親みたいなのセリフだな、それ」

「そりゃそうだよ。私は智流くんのファミリミみたいな存在なんだから」

「お母さんの言うことは絶対なんだから、とオレに指差す結城。」

「……うわあ、ホントの母さんより厳しい。」

「ウチって基本、放任主義だから。」

「ま、補足説明だけど。」

「んじゃ、また明日な」

「うん、また明日ね」

「そうして、オレたちは校門前で別れた。」

「こうして、オレは“原因”の一日を終えた。」

* 承・追 *

翌日。二年生二日目。

お約束通りのフライングボディプレスでヴィアンを起こし、いつものように家族揃って朝飯を食って、普段より少し早く家を出た。実はオレはやればデキる子なのだ。

二度寝（朝食後の）と無駄な語りがなければ、遅刻なんてしないのだ。

別に、担任の魚住さん（いさづき）が怖いから早く出たわけじゃないのだ。

別に、フライングボディプレスで脇腹を痛めて二度寝できないわけじゃないのだ。

.....

..... 案外あの技、危険だな。

姉ちゃん、あんな技とか（舞の海並みのバリエーション）を毎朝オレに繰り出して、よく怪我してねえな。

そんな風にガキの頃の思い出を、心と脇腹の痛みと共に感心しながら歩いていると、昨日別れた校門前によく見慣れた後ろ姿が見えた。

少し早足で彼女の隣に並び、

「おはよ、結城（ゆいぎ）」

と、声を掛けると、

「あ、おはよう、智流くん（ちりゅう）」

いつも通りの声が返ってきた。

「ねえ、ちよつと聞いて。昨日あの後、ものすつごく大変だったんだから」

と、女子特有の少し大袈裟な前振りをする結城。

その黒く艶やかな髪には、昨日と変わらず桜の髪留め。

「何故だか分からないけど、帰り道でさらに二人に突然告白された

んだよ。しかも、二人とも津々高生だけど、また私の面識ない人。これも智流くんの言ってた『一目惚れ』ってヤツなのかな？」

「地味キヤラなの？」

「あ、その言葉ちよつと傷ついた。自分で言う分にはイイけど」

「あ。悪い、ゴメン、すまん、申し訳ない、かたじけない」

「いやいや、最後のは謝ってないし」

「で、どうしたんだ？ どっちかOKしたのか？」

「いやいや、そんなよく知らない人の告白、受けるわけないでしょ
いくら地味キヤラでも。」

と、結城は笑う。

「でも本当になんなんだろ？ 春だから、みんな浮かれてるのかな
？」

「あー、確かに。地球温暖化がひどいつて聞くもんなー」

「え！？ そんな地球全体の問題なの！？」

などと、他愛もない話をしながら校舎に入り、靴箱に向かったところ
で、オレは言葉を失った。絶句した。

それほどビツクリした。つか、正直引いた。

当人の結城は、スクールバッグを落としてフリーズしていた。

小さなその空間に溢れかえるほど いや、実際に溢れているほど、
結城の靴箱には手紙が詰め込まれていた。

朝の学校・靴箱・手紙。

中身は見えていない。だけど、そのフレーズから連想できるのは、
どう考えてもアレしかなかった。

マンガとかで、たまに見るような光景。

実際に見ると、正直、気味が悪かった。

そしてオレはこのときようやく、何かがおかしい、と思った。

* 承・更 *

放課後。夕暮れ。屋外プール横。

「あー、腰痛え」

上半身を大きく後ろに反らしてストレッチをしていると、

「おつかれ、智流くん」

オレの目からは天地逆になった結城^{ゆづき}が声を掛けてきた。

「草むしり、終わったの？」

素早く上半身を戻して振り返ると、続けてそう訊いてきた。

「おう、完璧。魚住^{うおすずみ}さんもこれなら文句ねえだろ」

オレは辺りを見渡す。

キレイな地面と、三つのゴミ袋。

数時間前まで草が生い茂っていたとはとても思えない。

「つか、結城、なんでまだ学校いんだよ？もうすぐ夜になるぞ」

「あ、いや、あの手紙の全員にお断りしてきて、気付いたらこんな時間に……」

「え？ マジで？ 全員に会ってきたの？」

全五十三人（手紙を教室に持っていった二人で数えた）に？

「うん。相手が想いを伝えてくれたんだから、私もちゃんとそれに応えないと思って」

「しっかりしてるな、お前は。でも、そのしっかりついでにさつさと帰れ、暗くなる前に。オレも魚住さんに報告したら帰るから」

「あはは、今日は私が注意されちゃった。それじゃあ、お父さんの言う通り、急いで帰りますか」

「誰がお父さんだよ」

せめてお兄ちゃんにしとけよ。

いや、ただの幼なじみだけ。

「じゃあ、また明日」

「おう、また明日」

そうして今日は、結城と別れた。

いや、別れたはずだった。

「お、チルチルくん。今、帰りかい？」

完全に日が落ちれば、闇に溶け込んでしまいそうな服装の男つまりヴィアンに会ったのは、ちょうど校門を出たときだった。

「なんでお前がこんなところにいるんだよ？　つーか、そのあだ名やめろ」

そのまま足を止めず、帰り道を歩き続けるオレ。

ヴィアンもそのペースに合わせて隣を歩く。

「えー、君にぴったりだと思っただけだなあ」

さとの、智流、チル、チルチル。

最初は単なる読み違いのあだ名、だったんだけど。

「で、僕がここにいる理由は、急遽おつかいを頼まれたから」

と、手に持ったエコバック（確かにウチの）をオレに見せるヴィアン。

「本当に美代子^{みよこ}さんはドジっ娘だよ。カレーを作るのにカレールーを買い忘れるなんて」

「人の母親を下の名前で呼ぶな。人の母親をドジっ娘って言うな。次言ったら殺すぞ」

「物騒なこと言うねえ、最近の若い子は。だけど“殺せる”ものなら是非ともお願いしたいねえ」

と、ヴィアンはニヤニヤと笑う。

……うわあ、本気で殺してえ。

その方法は思いつかないし、あるかどうか分からないけど。

「で、君はこんな遅くまでどうしたんだい？　学校から出てきたから、また病院に寄ってきたわけじゃなさそうだし」

「ああ、ちよつと罰当番をな」

「なるほど。だから僕は登校前に散々言っただよ、そんな全身クロヒヨウ柄の」

「着てねえよ！ 超普通の学ラン着てるだろうが！ お前の目は何を映してんだよ！？」

「つーか、クロヒヨウ柄って黒一色じゃねえか。

学ラン」黒。あながち間違いでもないけど。

「まあ、それはさておき。この辺り、何かイイ匂いがあるねえ」

あからさまな話題転換で、鼻から空気を吸い込み、ヴィアンは目を細める。しかし、

「は？ しねえよ、そんな匂い。バッグの中のカレーの匂いじゃねえの？ もしくはお前が腹ペコなだけか」

オレは否定する。一応香ってみたが、空気は無味無臭だ。

「まあ、僕が腹ペコなのは認めるけど、カレーみたいなスパイシーな匂いじゃないよ。もっと甘くて魅惑的に匂いがあるんだよ」

「なるほど。目だけじゃなくて鼻までイカレてるんだな、お前は」
「うわ。相変わらずのS発言だね。そんなサディスティックな性格だから、いつまでたっても彼女が出来ないんだよ」

「うるせえよ。つーか、ついこのあいだ会ったばかりのヤツにそんなこと言われたくねえよ」

「ほら、そういう言葉遣いもいけないんだよ。さらに君は『すすきはらさとり』でイニシャルまでSSなんだから、DSどころかXSなんだよ」

「お前、それは身長の話か！？ オレのサイズがXSだって言ってるのか！？ 違うぞ、オレはMだ！」

確かに、長身のお前から見たら小さいだろうけど！

確かに、クラスでも背の高い方ではないけど！

「いやいや、僕はそんなこと言っていないよ。自意識過剰ってヤツだよ。そういう風に思ってるから、そういう風に聞こえるんだよ。それこそついこのあいだ、経験したばかりだろう？」

それから、と周囲を一瞥してからヴィアンは言葉を続ける。

「今の最後のセリフは、大声で言うもんじゃないよ。誰か知らない人が聞いたら、完全に変態の発言だよ」

オレはMだ、って。

「はっ！！」

オレは慌てて周囲を見渡す。

ほとんど日が落ちて暗くなっているが、辺りに人影はない。

……良かった。

ここはもうウチの近くだ。

変な噂をされても困る。白い目で見られても困る。

彼女が出来るどころか、ご近所さんがいなくなる。

まあ、家族に聞かれるくらいなら、変な誤解をされることもないだろうけど。

あと、ファミリーみたいな存在の結城も。

……あ、そうだ。

結城のこと、ヴィアンに訊こうと思ってたんだ。

結城の“異常”のことを。

「あのさ、ヴィアン」

と、口を開いた直後だった。

宵の口の闇を切り裂くような、悲鳴が聞こえたのは、よく聞き慣れた声の、よく聞き慣れない声。

それは確かに、結城真実^{まみ}の声だった。

* 転 *

「サキユバス」

開口一番、ヴィアンはそう言った。

そして続けて、

「何度も言うようだけど、僕は専門家じゃないから正確な情報じゃないかもしれないけど、それは承知しといてね」

と、例によって例の如くオレがあるいは他の誰かに言い聞かすように、言った。

「そんなこと分かってるから、さつさと本題に入れ」

「はいはい。本当に君はせっかちさんだね。でも、あんまり早い男の子は女の子に嫌われちゃうよ？」

「うるせえ、黙れ。意味分かんねえこと言っな」

「あれ？ 分からなかった？ そんな君は是非とも『お父さんやお母さんに訊いてみよう！』」

「やめろ！ 親子関係ギクシャクするわ！ ホントにやる子がいたらどうすんだ！」

「ん？ 『ホントにやる子』って誰のことだい？」

「うるせえ、黙れ、殺すぞ」

「“殺せる”ものなら是非」

と、ニツコリと笑うヴィアン。

「……………」

それに対して、オレはあからさまに不機嫌な表情で黙る。

こういう場合は、こういう態度が効果的。

ついこのあいだ出会ったばかりでも、そのくらいはもう知っている。

だからヴィアンは、やれやれ、といった感じで肩をすくめると話

を続けた。

「サキュバス。言い換えると夢魔^{むま}や淫魔^{いんま}。その名の通り、夢あるいは現実世界に相手の理想の女性像で現れ、その姿で魅了し、最後には淫らな行為で男性の精を絞り尽くす悪魔」

「……その『サキュバス』に結城^{ゆづき}が取り憑かれてるっていうのか？」
「いやいやいや、こつちも何度も言うようだけど『取り憑かれてる』なんて人聞きの悪い言葉、使わないでほしいよ。『僕ら』はそういうことはしない　いや、できない。『僕ら』はそういう存在だからね。だから今回も、彼女がそう在りたいと願ったから、そうなったんだよ。つまりニュアンスとしては『取り憑かれてる』より『宿している』の方が近い言葉だね」

「はー……まあ、どうでもイイや」

“僕ら”の存在意義に関わることだからどうしてもよくないよ、と訂正するヴィアンを無視して、オレは話の核心を切り出す。

「で、結城を助ける方法はあるのか？」

すると少し間を開けてから、

「それは、サキュバスを取り除く方法、と考えていいのかい？」

と、ヴィアンが答える。

「当たり前だ。それ以外ないだろ」

「そうかい？　今まで僕が出会ったサキュバス“もどき”は誰もが皆、人生を謳歌していたよ？　だってモテモテ人生だよ？　相手を利用すれば、金も権力も名誉さえも思いのままだよ？」

「そんなこと知らねえよ。それこそ、どうでもイイ。オレは今、結城を助きたいんだ」

あいつの悲鳴なんか、二度と聞きたくねえんだ。

「ふうん、君は相変わらずの利己主義者だねえ」
^{エゴイスト}

と、ニヤニヤとヴィアンは笑う。

「……悪いかよ？」

「いいや。人はそう在るべきだと、僕は思ってるよ」

と、今度はニッコリとヴィアンは笑う。

「だからこそ、彼女は望んだんだ。願ったんだ。サキュバスを、求めたんだ。そして、宿したんだ」

「……………」

サキュバス、の説明は分かった、けど、

「だけど、理想の女性像で現れる、つてのは叶ってねえじゃないか。実現してねえじゃないか。見た目は普通に結城だったぞ」

「お、君もなかなか分かってきたね。その通りだよ。結局のところ『サキュバス』なんて悪魔、存在しないんだよ。いるはずなんて、ないんだよ」

だからサキュバス“もどき”なのさ。

「なのに彼女は求めた。だから中途半端に叶った。姿形は変わらなけれど、フェロモンの異常分泌くらいは実現した。ただし、相手は無差別に」

「だから突然告白されたり、さつきみたいに男に襲われそうになったのか……」

「その通り。さっきの暴漢くんも多分フェロモンに　サキュバスの“魅了”に当てられたんだろう。暴漢くんはおそらく今ごろ、自分が何をしていたのかなんて忘れている頃だろうよ」

言わば彼は加害者じゃなくて、被害者だったんだよ。

「で、具体的に何をすれば結城を元に戻せる？」

「うーん、そこが問題なんだよなあ」

「なんだ？　何が問題だ？」

「普通はね、もつとサキュバスの力が表面化している　いや、させてるんだよ。何せ、モテモテ人生だからねえ」

羨ましい限りだよ、と無駄な感想を一度挟んで、

「それで本来なら僕が『ガブリ』とするだけで終わるんだけど、彼女はそうじゃない。彼女自身がそれを拒んで、封じ込めている。ま、完璧には出来てないから、力が漏れてるけどね」

サキュバス“もどき”の“もどき”だね、とヴィアンは笑う。

「望んだくせに、拒んでる。一体、何がしたいんだか僕には分から

ないよ。チルチルくんの話を聞く限り、まったくもってでさっぱり皆目見当も付かないほど全然到底、僕には分からないよ」

「？ 分かんねえくせに偉そうだな」

「……はあー。わざわざ嫌みで言ってるのも、君には分からないか……」

やれやれ、とまた肩をすくめるヴィアン。

「？ よく分かんねえけどオレのこと、バカにしてんのか？」

「バカに、というより呆れてるんだよ。君はもっと人の心を理解すべきだ、って」

「そんなもん簡単に理解できたら苦労しねえよ」

「君の『能力』なら出来るじゃないか。というか、早速その『能力』をまた使ってもらうよ」

「……結城の『夢』に入り込むのか？」

「その通り。さすがに二度目となると、察しがいイね」

「……はあ。またあの『能力』を使うことになるとはな……」

やっぱり超普通の人間には戻れないんだろうな いや、元々普通じゃないのか、オレは。

「だけど、ようやく三戦目にして『夢魔』とはツキが向いてきたね。『夢』は君の得意分野だもんね。さあさあ、早くサキュバス退治に行こうじゃないか」

「？ このあいだと違ってずいぶんノリノリだな」

「そりやそうだよ。サキュバスは低レベルの割に美味しいんだ。特に若い女の子は格別に美味しい」

と、ニヤニヤと笑うヴィアン。

「……その表情で今の最後のセリフは、かなりエロいぞ、お前」
多分、ウチの家族が見ても引くわ。

「ああ、失礼。久々の食事なんで嬉しくてたまらなくてね」
そして、白い歯を見せて笑いながら、

「何せ、僕は腹ペコなんだ」

と、続けた。

鋭く長い八重歯を

吸血鬼“もどき”の牙を見せて笑いながら。

* 結 *

半月が輝く頃。夢守神社境内。実家の客間。

「本当によくこんなもので出来るよね」

作業を進めながら、感心するようにヴィアンは言った。

「まあな。相手が眠ってるのと、『舞台』が整ってる条件さえクリアできればあとは簡単だ」

オレも作業の手を止めず、そう答える。

「……………」

穏やかな顔で、オレたちの作業のちょうど中間で、結城は布団の中で眠っている。

そんな結城を横目に、オレたちは境内で拾ってきた玉砂利を並べていた。布団からおよそ一人分くらい離して、布団を囲うように四角く等間隔に。

そんな作業を、眠る少女のそばで、男二人が黙々と行っている。

……………。

端から見ればかなり異様（シユール？）な光景だが、そのことにオレが気付くのはしばらく後の話になる。

……………。

「ところで、人払いは大丈夫かい？」

この光景に気付いているかどうかは分からないが、ヴィアンがそう訊いてきた。

「ああ。父さんと母さんはテレビに夢中だし、厄介な姉ちゃんも風呂に入った」

オレの部屋に声掛けもなしに入ってくるような予測不能な姉ちゃんだが、彼女が長風呂なのをオレは知っている。

ふっ、姉ちゃん敗れたり。

…………いや、戦ってるわけじゃねえけど。

ちなみに、結城に襲い掛かった男を撃退したのも姉ちゃんだ。

「ちっ。生け捕りにしようとな手加減するんじゃない。おかげであの野郎を逃がしちゃった」

と、気を失った結城を抱えながら恨めしそうに吐き捨てていた。

……生きたまま以外に捕まえる選択、あったんだ。

我が姉ながら、相変わらず怖え。

と、ガキの頃の恐怖体験を思い出しかけたところで、オレたちは全ての玉砂利を並び終えた。

「よし、これで『舞台』は完成だ」

玉砂利で囲った領域、空間。それを『舞台』と見立てることがオレの術式。

そして、後はそこに入るだけ。

「完成、はいいけど、君は着替えなくていいのかい？ 学ランじゃ動きにくくないのかい？」

「ん？ まあいいよ、別に。それに着替えてる間に結城が目覚ましたら意味ねえし」

結局、気絶した結城をウチまで運び（基本姉ちゃんが。オレたちは付き添ってただけ）、客間に寝かせ（母さんと姉ちゃんが。オレたちは布団出ただけ）、結城んちに電話を入れ（母さんが。オレたちは見てただけ）、さっさと晩飯（肉じゃがに変更になった）を食べ、オレの部屋で作戦会議をして、着替える間もなく今に至っている。

「つーか、お前もそのカツコでいいのかよ？ そんな動きにくそうなカツコで」

ヴィアンもオレと同様に、着替える時間はなかった。

室内なのでコートは脱いでいるが、黒のシャツ・ベスト・ズボンというカツコ。しかも、無駄にレースやラベルが付いているモノ。「ああ、それなら大丈夫。何度も言うように僕は戦闘能力皆無だから、戦闘には参加しないよ。いつも通り、いざというときの“サポート”に専念するよ」

と、ニツコリ笑うヴィアン。

「あつそ。まあ、期待はしてなかったけどよ」

「うん、それが正しいよ。僕も所詮、ヴァンパイア“もどき”だからね」

.....。

それならオレは、人間“もどき”なんだろうか？

こんな術式を使えるオレは、間違いなく普通の人間じゃないんだろつ。

.....ま、今はそんなことどうでもイイや。

こんな『能力』で結城を助けられるなら、そんなことはホントにどうでもイイ。

それならオレは、人間“もどき”でイイ。

それならオレは、人間“もどき”がイイ。

「んじゃ、行くぞ」

「はいはい。いつでもどうぞ」

「.....」

オレは目をつぶり、一度心を落ち着かせてから、

「『ゆめかくら夢神楽』」

そう唱えて『舞台』の中に踏み込んだ。

結城の『夢』へと、オレたちは入り込んだ。

* 結・続 *

そこはウチの、夢守神社^{ゆめもり}の境内だった。

ただし、空には太陽が高く登り、そして神木がまだ立派にそびえていた。

「これは……オレが小学生くらいの景色だ」

中学に入ってすぐ、神木は雷で焼けている。

だからこれは、それ以前の光景だ。

「ふうん。これが彼女の『夢』　『想い』がある風景か」

やっぱりね、と隣に立つヴィアンは呟いた。

「まあ、ガキの頃は結城^{ゆづき}もずっとここで遊んでたからな」

「……本当に君は、なーんにも分かってないんだねえ」

ホントやれやれだよ、とまた肩をすくめるヴィアン。

「なんだ、また呆れてるのか？」

「いいや、今回は少しバカにしてる。だけど、そんな君でも僕の言ってることをすぐに、まさに身をもって、知ることになるよ」

そう言い切ると、まっすぐと前を見た。

オレも、バカにされたことにムカついたが、その方向を見据えた。

広い境内の真ん中に『彼女』は立っていた。

いつも通りの、しっかり校則を守った制服。

いつも通りの、きっちりまとまった三つ編み。

いつも通りの、すっきり無駄のない黒縁眼鏡。

そして昨日からの、桜の花の髪留め。

「……結城？」

「へえ。君には、そう見えてるのか」

「……人のセリフ、パクるなよ」

「ああ、失礼。僕には『金髪グラマラス美人』に見えてるものだから、ついね」

「は？ 黒髪黒眼鏡のいつも通りの結城じゃ」

「私のこと、無視しないでくれる？」

結城がそう言うや否や、黒い『何か』をこちらに飛ばしてきた。瞬時にオレはそれに反応し、横にかわす。

しかしヴィアンはその場から動くことなく、

「うぐっ！」

『何か』に胸を突き刺され、貫かれた。

「あれ？ お一人様、もうおしまい？ あはははは、つまんないの」

そう笑う結城の後頭部から『何か』は生えていた。黒く艶やかな髪之三つ編み。

それが人間の髪とは思えないほど瞬時に伸び、ありえない鋭利さでヴィアンを貫いていた。

「あははは、弱すぎ！。一体こんなとこに何しに」

「なんちゃって」

貫かれたままのヴィアンがそう笑うと、代わりに結城の笑顔が消え、その凶器を伸ばしたときと同じ速さで引き戻した。

そして音もなく、血もなく、ヴィアンの身体は“元に戻った”。

「な、なんで死んでないの、アンタ！？」

黒縁眼鏡の奥の瞳を丸くして、結城は訊いた。

「こんな程度じゃ僕は死なない いや、死ねない。僕はヴァンパイア“もどき” いや、こちらの世界では“ほぼ”ヴァンパイアだから。その最たる特性の『復元』は回復や治癒なんてレベルじゃないから、そんな攻撃じゃあ傷一つどころか、血一滴すら流せない」と、ヴィアンが質問に答えると、あははは、とさっきまでと同じく結城は笑い出した。

「なあんだ、同族じゃないの。だったら分かるでしょ？ 私の邪魔をしないで」

「そんな怖い目で睨まなくても、君の邪魔をする気はないよ、僕は」
そう言うと、ヴィアンは数歩離れたところにいるオレを見た。
それにつられて、結城もこちらを見た。

「けどそんなことは気にせず、オレはズボンのポケットから『武器』を取り出した。

サイズは、開いたケータイと同じくらい。

楕円の円柱のようなフォルム。

年季の入った朱塗りのカラーリング。

「ちょうど真ん中には一本の切れ目が入っている。

「あはっ、何それ？ 短刀？ 小太刀？ それにしても短すぎない？」

「そんなんじゃない私まで届きませんよー、と不愉快な声で笑い続ける結城。

「……いや、結城はそんな顔で、そんな笑い方はしない。

こいつは、サキュバスだ。

「『無太刀・言乃刃』」

そう唱えて、オレは刀を抜く。

すると、一瞬だけ警戒の表情を見せた後、

「あはははは、やめて、お腹痛いってば。何それ？ 短刀でも小太刀でもないじゃん。肝心の『刀身』がないじゃん」

「ないないない、と一層不愉快にサキュバスは笑う。

「……確かに、そうだ。

オレが両手に持っているのは、鞘と柄だけだ。

『無太刀』は、そういう刀だ。

「けど刀身は『言乃刃』は、今はまだ、あいつに見えていないだけだ。

「へえ。お前には、そう見えんのか」

そう“宣言”してから、オレは右手の柄を大きく横に振る。すると、長く直線的な刀身が、鞘のサイズに合わない刃が、現れた。いや、そういう風にサキュバスにも今、見えているはずだ。「ど、どこからそんな刀身が出てきたの!？」

狙い通り、サキュバスはそう驚いた。

よし、“宣言”は有効化してる。

そう確信すると、オレはサキュバスに向かって駆けた。

一気に斬り込みに向かった。しかし、

「あはっ、遅いわよ!!」

鞭のようにしなやかに、槍のように鋭い黒い三つ編みが、オレに向かって飛ぶように伸びていた。

とっさにそれを『言乃刃』で上へと弾く。

しかし、それはまるで意思を持っているように再度、上からオレを貫こうとした。

紙一重で二撃目をかわすと、オレは大きく何度か後ろへ跳んで距離を取った。

サキュバスもそれを見て、一度その凶器を素早く引き戻した。

『言乃刃』を構え直す。剣術を習ったことがないので我流だが、それでも自分に一番合ったスタイルで。

「ねえ、この髪留め、気付いた？」

唐突に、サキュバスはそう訊いてきた。

だけど、その表情も声も結城のものだった。

「……毎日のように会ってんだ、気付かないわけねえだろ」

「ふうん……じゃあ中学校の卒業式の日のこと、覚えてる？」

「……お前がオレと同じ高校に」

「……違うわよ!!」

結城がそう叫ぶと、再び黒い髪留めの槍が飛んできた。

それを今度は『言乃刃』で右に受け流すと、そのままオレは再び結城に向かって駆けた。

「あの日は私が初めて髪を下ろしてみた日！ 三つ編みは子供っぽいかなって思ったの！」

背後から、受け流した槍が迫る。

振り返ってはいない。気配で感じる。

だからその気配が最大になった瞬間、その場で円を描くように回転し、背中では仰け反るようにかわす。そしてその勢いを殺さず、オレは駆け続けた。

一方、結城は自分に向かってきた槍を大きく舌打ちしてから一度引き戻し、

「小学校高学年のとき、恥ずかしいからって智流くんは私のこと苗字で呼ぶようになった！」

叫びながら、再度オレに放った。

速いっ！

まっすぐに今までの比でなく速く、オレの心臓を目掛けて飛んでくる黒い槍。

弾く、受け流す、そして駆ける。

一瞬にしてその全ての選択肢を捨てた。

立ち止まり、『言乃刃』の腹で受け止めることを選択した。

ガキン、と金属同士がぶつかるような音を響かせ、オレを数メートル押し戻して、槍はようやく止まった。

力が、抜けない。完全に拮抗している。

鋭い槍の切っ先の一点だけに、神経を集中させる。

「高校に入って、初めて別のクラスになって、授業中に智流くんの寝顔が見られなくて寂しかった。こっさり起こしてあげられなくて悲しかった」

少しずつ少しずつ、槍に込められた力が増していく。それと共に、オレの身体は押されていく。

「だからね、気付いたの」

力を加えてるようにはまるで感じさせない平然とした口調と表情で、結城は続ける。

「ああ、私は、もうこんなにも、智流くんのこと
が 好きなんだ
って」

その瞬間、力のバランスは完全に崩れた。

しかし、オレは後ろに倒れることはなかった。

むしろ、逆。

オレの身体は前に倒れていた。

槍に込められた力が抜かれ、それはただの三つ編みの髪に戻って
いた。

だが、この程度なら予想範囲内だ。瞬時に対応できる はずだ
った。

混乱してさえないければ。

結城は、オレのことが、好きだって？

だって結城は、ただの幼なじみで、家族みたいな存在で、いつも
オレを助けてくれるヤツで。

なのに？

だから？

なんで？

ホントに？

あはは、本当に。

「男は皆、バカばかり」

そう言って、サキュバスが笑った。

刹那、目の前の三つ編みがバラバラにほどけ、なんとか踏み止ま
ったオレの上半身を縛り上げた。

「っ！」

反応したときにはすでに遅かった。
腕も、首も、腹の辺りまで縛られ、そのありえない力で動けなくなっていた。

なんとか右手だけでも！

『言乃刃』を持つ右手に力を込める。

せめて『言乃刃』が使えれば、この髪を切れる。
しかしその瞬間、

「あはっ、させるわけないじゃん」

右の手首を強く締め上げられた。

「っ！」

痛みあまり、柄が手からこぼれた。

唯一の武器を、失った。

それを嬉しそうな目で見ると、サキュバスは後頭部の髪を自在に
操り、新しい三つ編みを編み上げて、二本目の槍を作り出しながら、

「ねえ、智流くん、大好きだから」

結城の顔と声で、

「ここで死んで！！」

サキュバスは、笑った。

* 結・追 *

結論から言えば、二本目の槍がオレを貫くことはなかった。届くことすらなかった。

そしてさらに、オレは髪の手縛からも解放されていた。

理由は簡単。

槍も束縛も、『言乃刃』ことのはで斬り裂いたからだ。

もちろん、オレを助けたのはヴィアン ではない。

あいつはさつきから一步も動くことなく、それどころかポケットに両手を入れて、ただこちらを見ているだけだ。

戦闘能力皆無の戦闘不参加。

あの吸血鬼の『能力』には、攻撃力がない。優れているのは、異常なまでの防御力だ。

だから、オレを助けたのはヴィアンではない。

ならば、一体誰が？

答えは簡単。

唯一の武器『言乃刃』を落とした身動きできないオレを、唯一の武器『言乃刃』を持った自由に動ける『オレ自身』が助けた。

.....。

..... まあ、念のため言つとくと、オレは電波さんでも、ファンキ―な脳みその持ち主でもない。

それはキヤラ的に『オレ自身』の方だ。

正確には『ボク』。

春休みにオレを殺そうとした張本人。

オレと全く同じ姿をした、もう一人のオレ。

オレの影 オレの自己像幻視。ドッベルゲンガイ

そいつが文字通りオレの影から現れ、落ちゆく『言乃刃』を掴み、勢いよく足元から飛び出して、槍も束縛も斬り裂いた。

「お、『ミチル』くん、久しぶり」

ようやく片手をポケットから出して、ヒラヒラと手を振るヴィアン。

「久しぶり、じゃないじゃないですか、ヴィアンさん。ついこのあいだボクと会ったばかりじゃないですかあ」

と、言いながらもオレの隣に立ち、大きく手を振り返すミチル。

「相変わらずミチルくんは元気が良くて素直だねえ。チルチルくんにも少しは見習ってほしいもんだよ」

「うるせえ、黙れ、殺すぞ」

“殺せる”ものなら是非」

と、ニツコリ笑うヴィアン。

「チルチル。それはヴィアンさんに失礼だよ」

そう言っただけのミチルはオレをたしなめる。そして続けて、

「降り注ぐ日光の下で、とりあえず銀の銃弾で手足を撃ち抜いてから、さらに十字架を見せて動けなくして、そこに聖水でニンニクを胃に流し込ませて、最後に白木の杭で心臓を突き刺すぞ、って言わなきゃ」

満面の笑みで言った。

「……相変わらずミチルくんは残忍残酷だねえ」

と、ヴィアンは笑っていた。　　ような気がする。

「……なんなのよ、そいつ？」

とても低い声と突き刺すような視線で、完全に除け者にされていたサキユバスがミチルを睨みつけていた。

「ボク？　ボクはチルチルの影　　チルチルのドッペルゲンガー」

「お前の言うところの、同族、ってヤツだ」

そうやって、オレとミチルは二人で一つの質問に答えた。

「……あはは、なあんだ、あんたもこつち側の存在なんじゃない。

それなのに、そのくせに、私の邪魔をする気なんだ」

「まあねー。ボクはチルチルの影だから、本体に従うしかないんだよ」

ボクだつてホントは嫌々なんだよう、とミチルは絶対オレがしないような表情を見せる。

「あははははは、じゃあそれなら、もう手加減してあげない」

サキユバスがそう笑うと、その後頭部から無数の黒い髪の毛の槍が伸びた。

そして次の瞬間、それが彼女の周りを高速で回転し始めると、あつという間に黒いドームとなり、その身体を包み隠した。

「あはは、これが私の絶対防御。そしてこれがこの状態での絶対攻撃!!」

途端、ドームからいくつもの槍が飛び出し、オレたちは槍の雨に包まれた。

「あはっ、あはは、あははは、あははははは」
黒いドームの中から、笑い声が響く。

槍を伸ばしては戻し伸ばしては戻し、雨を降らせ続けながら。

「死んじやえ。私の魅力に気付けないヤツなんか、穴だらけのボロ雑巾みたいになって死んじやえばいい。美しい私の前に、醜い姿で跪けばいい」

そう言つて笑いながら、雨を降らせ続ける。

「ねえ、まだ生きてる？ ギブアップしてもいいよ。私みたいに美しくて魅力的な女性は見たことない、って言ったら許してあげてもいいよ」

そんなことを言いながらも、雨は止まない。

「限界なら限界って言つていいよ。あはっ、無理か。もうとつくに死んじやつてるもんね」

「……ああ、限界だ」

オレがそう唸るように呟くと、突然雨が止んだ。

そして全ての槍がドームに引き戻された。

約束を守った、わけじゃないだろう。

おそらく、自ら降らせた雨で見えなくなっていたオレたちの姿を、確認するためだろう。

もつとつくに死んでると思っていた、オレたちを。

「な、なんで？　なんでまだ生きてるの？　なんで傷一つ付いてないのよ！？」

黒いドームから、叫びにも似たそんな声が響いた。

「よく見るよ。一発かすったから、制服破けちまってんだろ」

オレの言う通り、袖が少し破けてる。

ま、服ならあっち側に帰っても影響ないから、どうでもイイけど。
「ウソでしょ！？　あれを全部かわしたっていうの！？」

相変わらずドームから、ヒステリックな声が響く。

「ああ、かわした。オレ一人なら無理だけど」

「　　ボクたち二人なら、なんの問題はない」

そう言つてオレは鼻で笑い、ミチルはニヤリと笑った。

「だけど攻撃されっぱなしとか、オレの性格的に無理。もう、限界」
「それに、いつまで経っても埒が明かないしね。だから一気にカタをつけさせてもらうよ」

そう言い切ると、オレたちは駆け出した。

ただしドームじゃなくて、ヴィアンに向かって。

「何か知らないけど、させてあげない！！」

再び槍の雨が迫る。

しかしそれを一瞥することもなく、オレは駆ける。

見る必要は、ない。

全てミチルがなぎ払うから。

そのためにさっきの雨の中で『言乃刃』を渡しておいたから。

オレの『オレ自身』に対する絶対的な自信があるから。

「ヴィアン、血をよこせ」

ヴィアンの前に立つと、オレはそう言った。しかしヴィアンは、
「何度も言ううただけど、あんまり短期間で連続は君の体に悪影響だよ」

お決まりのように洩った。

「分かってる。だから今回は少しだけでいい。それと……ちょっと耳貸せ」

オレのその言葉を聞くと、ヴィアンは少しだけ屈んだ。ホント、少しだけ。

身長差があるので、そうするしかないのだ。

念のため言っておくが、オレが小さいのではない。ヴィアンが大きいのだ。

……あくまでも、念のため。

「えー、それはダメだよ。約束を破ることになるよ」

オレの耳打ちを聞き終えると、ヴィアンはそう言った。

「知らねえよ、お前が勝手にした約束なんか。それにオレ、約束は平気で破る主義、だから」

そして続けて、

「それにお前、腹ペコ、なんだろう？」

と、オレは悪い笑みを浮かべた。

「ねえ、まだ？ そろそろボク一人で相手するのキツいんだけど！」

ミチルがそう急かした。オレたち三人に向かって飛んでくる槍を全て捌きながら。

「……まったくチルチルくんは性格が悪い上に、ヴァンパイア遣いが荒い」

ホントやれやれだよ、と一度肩をすくめるヴィアン。

そしてオレの両肩を後ろから固定してから、ガブリと首筋に咬みついた。

「っ！」

鋭い痛みが体を走る。

だけど三度目ともなると、少し慣れてきた。

「はい、終了」

吸血鬼の牙を引き抜くと、ヴィアンはそう言った。

オレは咬まれたところをさすってみる。

傷痕は、もうすでに、ない。

準備は、完了だ。

「ミチル、行くぞ」

「りょーかい」

言つや否や、ミチルから『言乃刃』を受け取り、オレは駆け出した。

さっきまでとは比べものにならないほど速く。

速く、疾く、迅く。

前に身を屈み、ヒヨウの如く。

「来ないでよ!!」

途端、黒い槍の集中豪雨がオレに降り注ぐ。

だが、オレは立ち止まらない。むしろ、さらに加速する。

頬や、腕や、脚に、槍がかすめる。

だが、そんなことを気にせずオレは駆け続ける。

確かに痛いもんは痛い。だけど、その痛みを感じたときにはもう、そんな傷は『治癒』している。

だって今のオレの身体には“ほぼ”吸血鬼の血が流れているから。だから致命傷になりそうな槍だけ、最小限の動きでかわし、『言乃刃』で払い、一気に距離を詰めていく。

そして、

「まずは防御を崩させてもらうよ!」

黒いドームに一閃を見舞う。

瞬間、ドームは大きく裂け、その中のサキュバスが見えた。

サキュバスは 笑っていた。

「あはっ、そう来ると思ったあ」

そう言ったときにはすでに、槍が身体を貫いていた。

裂けるほど吊り上がったサキュバスの口角のすぐ横から伸びた一本の槍が、正確に心臓を貫いていた。

「あははははは、残念だし」

「なんちゃって」

串刺しになったままの『ボク』が、そう笑った。
直後、オレはミチルの背後から飛び出し、ミチルの背を跳び越した。

「終わりだー!!」

動転した表情を見せるサキュバスに『言乃刃』を振りかざす。しかし、

「私はまだ終わらない!!」

瞬時にその目に殺気を宿し、もう一本の槍を、ミチルを貫く槍の反対側から突き伸ばした。

大きな金属音と衝撃。

その一撃を『言乃刃』で弾いたオレは、その反動で遠く吹き飛ばされていた。

「あはっ、あんたなんか私この絶対防御は破れない」
そう言いながらドームの裂けた部分が、あっという間に再生していく。

サキュバスのその姿が、あっという間に隠されていく。
だから親切なオレはそれが閉じきる前に、

「なんちゃって」

そう教えてあげた。

途端、ミチルの身体が黒い水のように崩れ落ち、本来のオレの影に戻った。

そしてミチルの身体によって隠されていた光景を、サキュバスも見ただろう。

まだ開いている絶対防御のわずかな穴から。

その驚きの瞳で。

ミチルを貫いていた槍の切っ先に咬みついているヴィアンを。

突き立てたその牙から、自分自身の存在を吸われている光景を。
次の瞬間、黒く艶やかな髪は急速に牙から侵食され、瞬く間に白く染め上げられていった。

そして、力なく、音もなく、色もなく、絶対防御は崩れ去った。
髪も肌も真っ白で、まるで干からびたような身体で跪くサキュバスの存在だけが、その中心に辛うじて残っていた。

魅力が一欠片もなく、そして何より結城の要素が一欠片もないサキュバス“もどき”が。

「ねえ、お願い。なんでもするから。なんでもしてあげるから。だからお願い、殺さないで」

「……………」

そんな言葉を見殺しして一步一步、跪く彼女に近づく。

「嫌、来ないでよ。私はまだ、死にたくない　まだ消えたくない

！」

「……………」

涙を流す彼女の目の前で立ち止まり、音もなく右手を振り上げる。

「やめて、やめてよ。冗談でしょ？　私を斬るの？　そんな刀で、

そんな刀で　」

流れていたことがまるで見間違いのように彼女の涙が止まり、その瞳に明確な殺意が宿った。そして、

「そんな綺麗な刀を、この私に見せつけないでよ！」

ヒステリックに叫びながら、彼女が飛びかかってきた　いや、

飛びかかるうとした。

だから、なんの躊躇いもなく、

「へえ。お前には、そう見えんのか」

そう言って、オレは結城真実を　サキュバス“もどき”を斬り下ろした。

* 終 *

「髪はね、また何度でも伸びるものなんだよ。特に女性は、あつと
いう間に。だからその度に、誰かが切つてあげないといけないんだ
……さすがのチルチルくんでも僕の言ってること、もう分かるよね
？」

翌朝。二年生三日目。石段を降りきつたところ。

いつも通りの、しっかり校則を守った制服。

いつも通りの、きつちりまとまった三つ編み。

いつも通りの、すっきり無駄のない黒縁眼鏡。

見慣れ始めた、ぴっかり色を添える桜の花の髪留め。

そんな結城真実^{ゆづき まみ}が、そこにいた。

「おはよう、智流^{ちりゅう}くん」

「おはよ、結城」

「昨日はゴメンね、なんか迷惑掛けちゃって」

「別に気にすんな。それより体調とか気分とか悪くないか？」

「うん、大丈夫。智流くんちで休んだ後、気分がスッキリしてたし、
家に帰ってからもうぐっすり寝たからすっごい元気」

　　って私、寝過ぎだね。

と、小さく舌を出す結城。

……………。

「……んじゃ、全快祝いに今度の土曜、映画でも行かね？」

「あはは、全快祝いって大袈裟。でも、ちょうど見たい映画あった
んだ」

「へえ、どんなヤツ？」

「なんかね、狼男の話の映画。クラスのみんなが面白かったって」
「ふうん、じゃあそれにするか」

「うん。それじゃあ今度の土曜日にね」

「了解……つか、いつまでもこんなとこいたら、また遅刻すんぞ」
そう言っ、オレは結城の前を少し早足で歩き始める。

「あ、ちよつと待ってよ」

急いで後ろからを追ってくる結城。

だから、結城が追いつく前に、

「あ、そっいやさ」

顔を見られる前に、

「言い忘れてたけど」

親切なオレは教えてあげる。

「髪留め、似合ってる」

後日、観に行った映画の記憶が鮮明な内に、オレは『狼男』と対戦することになるが、それはまた次の話。

第二話「vs・ろんずるウルフマン」に続く。

***終*（後書き）**

以上、もどきども第一話「vs. いやがるサキュバス」でした。
腑に落ちない点も多々残していると思いますが、あくまでも一話完結“もどき”なので、ご容赦頂けるとありがたい限りです。
感想・批評など頂けると、さらに嬉しい限りです。

では、ここまで読んで頂いた方々に最大級の感謝を！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3068/>

もどきども 第一話「vs.いやがるサキュバス」

2011年1月10日00時55分発行